

27	28	29	30	31	1
2	4	5	6	7	8
10	11	12	13	14	15
17	18	19	20	21	22
24	25	26	27	28	29
31	1	2	3	4	5
6					



50の やん! #14

華子、風邪をひく編

著:藍澤たすく
イラスト:かもめ遊羽

「らのけん」のひとつひとつの話?

三郷学園高校「ライトノベル研究部」

——通称「らのけん」。

それは世にあふれるラノベを読みまく
り、また自らも書きまくり、総合的にラ
ノベへの造詣を深めることを目的とした
志しの高い部活動……のはず、なんだ
けれど……。アレ? 実際フタを開けて
みたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」
の魅力! という感じで展開するまつた
り系日常部活「コメティイ」なのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情徑行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!



赤城操

クールレビューイーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。校正能力もプロ並み。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦労は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



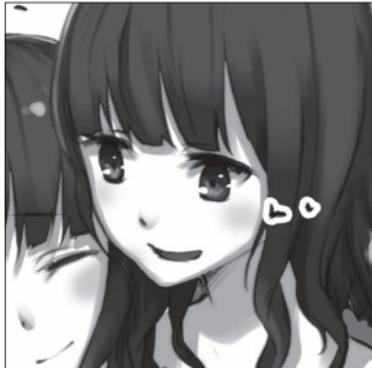
紺野司

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。



白井咲耶

華子の弟であり、かつ男の娘。見た目は華子そっくりでまるで双子のよう。
※ただしサイズは全然違う模様。



藏内豪三郎

本名は藏内・マリアンヌ・葉子。華子のデビュー作まんみーのイラストを担当するイラストレーター。華子にやや危険な方向の好意を抱いている御様子……?



「ふあ、ふあ……ふあつくちゅん！」

本日百回目のくしゃみを終えた華子は、枕許のティッシュでくちゅくちゅと鼻をかんだ。

「ふにゃん、全然熱が下がらない……」

38度を示した体温計をポーチに戻した華子はまたベッドの中に潜り込んだ。

日曜の昼下がり。

昨日から急に体調を崩した華子は、ずっとベッドにこもりきりだった。

「なんか食べて……栄養摂らなきや……」

意を決して立ち上がり、キッチンに行こうとする華子。

しかし。

「ふにゃにゃにゃにゃにゃー……」

ベッドから1歩出た瞬間、激しい目眩に襲われてその場にへたりこんでしまう。

「だめ……キッチンなんて母を訪ねて三千里よりもずっと遠いわ……イスカンダルの方がまだ近いわ……」

華子はため息混じりに意味不明な事を呟くと、敗北感と共にベッドに戻つていった。

「ああ、紺野さんに頼まれた『新人作家リレーコラム』書かなきやなんだけど、これじや何にも思いつかないよお（……）

華子はベッドの中でもぞもぞと身悶えた。みもだ

「でもこんなに熱が出るなんて何年ぶりだろう……あたし、風邪ひいても、滅多に高熱なんか出ないのに……」

華子はぐるぐると回る天井を見ながら、またため息をついた。

「もしかして……これ、風邪じやないんじやないかしら……」

思わず洩れる不穏な呟き。

弱気になってきた。

とんでもなく弱気になってきた。

ベリッシュモ弱気になってきた。

そして華子の弱気は止まらない。

「はっ……」

不意に華子は枕をぎゅっと握りしめた。

「この滅多にない高熱……激しい目眩……これって……これって……もしかして……」

華子の手が震えだしたのは、決して高熱のせいだけではないだろう。

「あたし、実は新種の殺人ウイルスとかに冒されてて……このまま人知れず死んでいっちゃうんじゃないかしら……」

華子は真顔でそんな心配をし出した。

そう、これは経験者なら判るであろう「一人暮らしの風邪特有の弱気」である。

物事がすべてネガティブに感じられ、淋しさは極限まで高まり、訳もなく悲しくなってしまう例のアレである。
 「ううううう、やだよう……一人で死ぬのはやだようううう……おかあーさーん、おとおーさーん……」
 華子がベッドの中で震え始めた瞬間。

ピンポーン

「やつほー、華ちゃん！　お見舞いに来たよー！」

「うわっ!? 大丈夫？ 華ちゃん死にそつじやん!?」

なんととか玄関まで這つて行き、ドアを開けた華子が見たのは萌、一斗、美玖、操——つまり、らのけん部員一同だった。

「みんな!?　どうして……」

可愛い教え子達の突然の訪問に、華子がぱあっと顔を輝かせた。

「あたしもいるよーん♪」

美玖の後ろから冰川英子——華子の幼馴染みの親友であり、かつ駆け出しの新人声優でもある——が、ひよいつと顔を出した。

「ひえちゃんまで!」

意外な親友の登場に、華子は嬉しさと共に戸惑い^{とまどい}を覚えた。

「ほら、昨日の朝電話した時、なんか体調悪そうだったからさ。もしかしてって思ってみんなで寄つてみたんだ」

「ひえちゃん……」

確かに昨日華子は英子と電話で話したが、それはこんなに風邪がひどくなる前の事だった。そんな微かな予兆^{よちよう}であたしの体調を察してくれるなんて……!

親友の細やかな気遣いに、華子は思わず目頭が熱くなつた。

「ほーら、どうせろくなもん食べてないんでしょ? あたし達が美味しいもん作つてやつから、華子はおとなしく寝てな」

「うん、ありがとう……」

華子はこくんと頷くと、また這つてベッドに戻ろうとした。

「んもう、華ちゃん水くせーな。言えばあたしが運んでやるのに~」

「あつ!?

華子の体がふわっと持ち上がる。

見るとすでに華子は美玖にお姫様だっこされていた。

「……」いう時でもセクハラはするんですね、黒田さん……」

◆

「えつ……な、なんのことかな、あはははは~♪」
「お姫様だっこをすると同時に、ナチュラルに胸とお尻を揉んでくる美玖に、華子はジト目を向けるのだった。

「ふわあ~、^{おい}
「生姜たっぷりのやわらか鶏雑炊^{とりぞうすい}! 風邪の時はこれが一番! まだおかわりあるからゆつくり食べな」

「ううううううう、ありがとう、ひえちゃんは命の恩人だよううううう~」

「もう、大げさだなあ、華子は

英子は快活に笑った。つられてらのけん部員一同も明るい笑い声をあげる。
さりげなく萌がつーと英子に顔を寄せてきた。

「ねえねえ、冰川先生? 冰川先生は華ちゃんとずっと同級生だつたんでしょ?」

「あー、もう学校は辞めたんだから、先生はやめてよ。なんだつたら『華ちゃん』に合わせて『ひえちゃん』でもいいよ?」

「いやー、さすがにそれは恐れ多いですよー。……んーと……じゃあ、英子姉さんでー」

萌はちょっと戸惑つたあと、英子に質問を続ける。

「英子さんは小学校からずっと華ちゃんと同じクラスだったんですか？」

「えっと、実はね、幼稚園から同じクラスだったから、幼稚園・小・中・高と15年間同じクラスだったんだ」

「えー、15年も!？」

萌と一斗が驚きの声を上げる。

「あははは、まあ、腐れ縁つてやつだね！」

「もぐもぐもぐ。ひどいよ、ひえちゃん、あたし腐女子なんかじゃないよー！ もぐもぐもぐ」

高熱のせいか、華子が雑炊を食べながら英子に見当違いのツッコミをする。

「ねえねえ、昔の華ちゃんってどんな感じだった？」

美玖が目をきらきらと光らせて英子に訊く。

「あははは、それがね、おんなじなの！ まったく変わらないのよ！ おんなじ！」

「でしようね」

いつの間にかに淹れた紅茶を静かに飲みながら、操が淡淡とそう応えた。

「もぐもぐもぐ。ひどいよ、ひえちゃん、あたしだって日々成長してるんだからー！ もぐもぐ

華子が唇を尖らせ、頬を膨らませながら抗議する。

熱で紅潮しているせいもあって、まるで茹であがったタコのようだ。

「まあまあまあ、怒らない怒らない。はい、これも飲みな」

「え？ あ、うん、ありがとう〜」

英子から湯呑みを渡された華子は、よほど美味しかったのか、一気にそれをぐくぐくと飲み干した。

「うわあ〜、あつたまるう〜……。ひえちゃん、これ何？」

「卵酒」

ガタツ

英子がそろそろ戻った瞬間、萌、一斗、美玖、操の4人が玄関に瞬間移動する。

みんな顔面蒼白だ。

「ん？ どうしたの、みんな？」

「え、英子さんは華ちゃんと15年間も同級生なのに、なんで知らないんですねかー!?」

「知らないって何を？」

英子がキヨトンとした顔で萌を見つめ返す。

「華ちゃんが洒、乱だつてことをですよー！」

萌が絶叫する。

「そうだよ、俺、この前華ちゃんが酔っぱらったとき壁に投げつけられたんだから！」

「あ、あたしだってひどいセクハラを……」

口々に被害を訴える一斗と美玖（※華子の酒乱エピソードの詳細を知りたい方はGA文庫マガジン2014年7月24日配信号掲載の「らのけん！」第一話をお読みください）。

「ひやつく……ひつく……ふふ……ふふふふふふ……」

「〔ひーっ!?〕」

怪しげな笑い声を洩らし始めた華子に、らのけん部員一同は心の底から恐怖する。

華子が顔を上げると、その目はすでにぐるぐるになっていた。

この卵酒はかなりアルコールがきついようだ。

「大丈夫だよ」

黒（せっぴ）が煎餅をぱりぱりとかじりながら、英子が事も無げに言い放つ。

「〔大丈夫じゃないですよー！〕 華ちゃんもう、めちやめちや酔っぱらってるじゃないですかー!!」

叫びながらクツを履き、屋外に逃げようとするらのけん部員一同。ちなみに操はもうやつかり姿を消している。この前自分の設定集を部室にばらまかれた事がよっぽどこたえたようだ。その時。

「うふふふふ、うふふふふ、なんか楽しいねえ～ひえちやん♪」

「そうだね、華子～♪」

まるで猫がじやれつくように、華子が英子にぴったりと身を寄せてきた。

「〔?〕」

事態が把握できず、華子と英子をガン見するらのけん部員一同。

「確かに華子は普段は酒乱だけね、熱がある時にお酒を飲むと超上機嫌になるんだよ～♪」

英子は華子のあごの下を猫のようにごろごろと撫でながら華子をぎゅっと抱き寄せる。

華子もされるがままに、うつとりと恍惚の表情を浮かべている。

「〔な、なんだ、そだつたんですか～…〕」

つかの間の恐怖から解放されたらのけん部員一同は心の底から安堵のため息をつく。

「ほら、可愛いでしょ、華子？ 今なら何したって覚えてないからなんでもやり放題だよ～♪」「マジで!?」

英子の無責任な言動に美玖が光の速さで食いついた。

「よ～し なら今だつたら華ちゃん触り放題……って、うわあああああ!?」

喜び勇んで華子に抱きつこうとした美玖を、華子が逆にしつかりと抱きすくめる。

そして。

「楽しいわあ～♪ 一緒に踊りましょう～♪ 黒田さん♪」

「うわっ!? うわわわわっ!?」
言うが早いが、華子は美玖をがっちらりとホールドしたまま、社交ダンスよろしくクルクルと回り始めた。

「ちよつ!? やめ!? 華ちゃん、目が回る!? 目が回るつて〜!!」「出た〜、華子の十八番! 酔っぱらいシャルウイーダンス〜!!」

英子はぱちぱちと手を叩きながら楽しそうに、踊る一人を見物している。

「本当にちよつとやめ……何、華ちゃん、この力!? 全然逃げられない!?」

「酔っぱらってる時の華子はプロレスラー並の筋力を發揮するからね〜諦めて踊りな〜」

「ほお〜ら、黒田さん、今度はサルティンバンコよお〜」

「うわああああああ〜!」

華子にまるでコマのように高速回転させられる美玖。もう目がぐるぐるである。

「ねえねえ、英子姉さん。華ちゃん熱あるのに、あんなに踊つてて大丈夫なの?」

「あははは、心配ないよ。あ〜やって踊つて汗かいて、疲れたらパタンと寝て、起きたら治つて

る、つてのがいつものパターンだから」

「そうなんですか〜、さつすが幼馴染み!

萌が感心しながら、踊る華子と美玖を見つめる。

「じやあ、黒田さん、次はシルク・ド・ソレイユね〜♪」

「ちよつ!? わつ!? あたし持ち上げられてる!? 華ちゃんに持ち上げられてる!? だ、誰か助けて〜〜!!」

美玖の絶叫も虚しく、誰も巻き添えを恐れて手を出さない。英子だけがどこからか取り出したビールを片手に楽しそうにそれを観戦している。

「いけえ〜、華子お〜! いいぞいいぞもつとやれ〜!」

「うん! ジやあ、今度は飛ぶよ〜黒田さん〜♪」

「えつ!? ちよつ!? 今度は何をする気、華ちゃんつてわあああああ〜!」

結局このアクロバティックなダンスは、1時間以上も続いたのだつた。
その後、美玖の姿を見た者はいない……。

